

新年おめでとうございます

龍之介が 35 歳の短い生涯を閉じる前月に認めた「或る阿呆の一生」（久米正雄宛）のなかで、「月の光にある」情景が、わずかな救いとして顕れる。日の光が表現されるとき、私は龍之介にその陰を感じる。38 歳で逝った太宰の例えば「斜陽」にあっては日の光は伊豆（半島）の安穩な生活を表現する上で役割を果たすが、龍之介同様、それは生きる上での闇を浮き出させる効果をもっている。 仏教到来の前にはこの国では、暮れから正月には祖先が戻ってくるとき、つまり黄泉の国との間に繋がりができると考えたようである。そういう時節だからであろう、寄る年波を感じる凡夫にあっても、来し方、行く末を振り返る。そして、小さな発見ではあるが、月の光を欲していることがわかったのである。

お詫び： 昨年はこの時期を境に長く国外にいるのをいいことに年賀をサボりました。頂いた年賀状を一葉ずつ丁寧に読ませていただきました。

バックは Auckland, NZ のスカイタワー上の月光を自宅から

皆様のこの一年のご多幸をお祈りします

2010 年元旦